

絵画コンセプトと表現スタイル

—<コンセプトのつくりかた>をつくることで見えてくる自身の世界観—

芸術学専攻 美術教育 木谷 安憲

第1章 絵画にコンセプトが必要とされる時代

第1節 現代アートのコンセプト

第2節 現代絵画のコンセプト

第2章 コンセプトとスタイル

第1節 自作の分析

第2節 コンセプトとスタイルの関係

第3章 コンセプトとスタイルと世界観

第1節 現代絵画のコンセプトをつくるために必要なこと

第2節 現代絵画のコンセプトをつくる

本論文は、私が絵画制作をする中で実感として持ちえた、そもそもコンセプトとは何か、自分が取り組むべきコンセプトをどのようにつくればよいのかという問題意識を出発点とし、コンセプトをつくる意味と影響について考察したものである。

第1章では、原則として西洋美術史を基礎にその延長線上で新しい可能性を追求する欧米の美術動向をベースにしたアートについての言説を探り、現代アートや現代絵画のコンセプトの概要を明らかにすることを試みた。

まず、現代アートのコンセプトへの言及が多い辛美沙、榎木野衣、村上隆、松井みどりの論述を取り上げ、西洋美術史の流れ、現代アートの歴史、日本人としてできる現代アート、などについての理解が必須になっている現状を明らかにし、言葉で伝えることができるコンセプトの必要性について考察した。これにより新しい視点を生み出さないものだとしたら、それは現代アートのコンセプトではない、ということが明らかになった。

次に、2006年にファイドンから出版された『Vitamine P 絵画の新しい視点』で取り上げられている画家114人（日本人は村上隆、奈良美智、杉戸洋の3名）を、批評家による文章を参考にしながら、現代絵画におけるコンセプトの大まかな枠組みについて考察した。巻頭エッセイでバリー・シュワブスキーが述べている、「絵画はイメージを表象しようとしているのではない」「絵画をめぐる思考を表現するためにイメージが存在している」という考え方を参照しながら分析した結果、現代絵画のコンセプトでは、あいだ、関係、境界、層といった言葉が多く使われていることが明らかになった。関係性や境界線を考えることは、現代社会に生きている我々にとっては重要なことである。また、新しい絵画イメージの可能性を探るために、美術史におけるさまざまなイメージを分析し再構成していくことも意味のあることだと言える。第1章の結論として、現代に生きる人間にとって切実な問いを立て、それに答えていくという構造、<創造的な問いを立て、創造的な答をつくる>ことが、現代アートのコンセプトにつながるということが明らかになった。

第2章では、自分にとって身近なところから現代アートや現代絵画のコンセプトを捉え、絵画コンセプトと表現スタイルの関係について考察した。

まずは私が金沢美術工芸大学を卒業した1986年から東京芸術大学大学院に入学する前、2009年までの期間について自作を振り返り分析を試みた。線的な表現、キャラクター、イメージ力が、私の絵画作品の特徴

としてあげられた。しかし、絵本や紙芝居制作、美術ワークショップの方が表現したいゴール地点が明確だったことが判明した。その理由は切実に自身のこととして考えていたテーマを表現していたためである。私が絵画で取り組んでいたことは、コンセプトをつくり絵画制作をするのではなく、一目見て私の作品だということが分かる表現スタイルをつくらうとしていたということが明らかになった。意図的に組み立てようとしたスタイルではなく、何か自分の中に元々あるような部分に目を向けることも、現代絵画のコンセプトをつくることにつながっていくのではないかと考えた。

そして、コンセプトが記憶に残るほどしっかり言語化している現代アーティストの宮島達男と、私が絵画作品を購入したことがあるジェイムス・シーハンのコンセプトと作品の関係について考察した。人間の命、死、戦争、通常の生死、人為的大量死、これらのことをテーマにした宮島作品のコンセプトと、LEDを使ってきた作家としての作品スタイルの関係について考察し、同じコンセプトであっても、表現スタイルによってメッセージが変わる可能性について述べ、表現スタイルにコンセプトが内在していることを明らかにした。また、コンセプトが明確でないものは欧米ではアートとして扱われないため、コンセプトと作品が、お互い補完しつつも決して視覚と思考が止まることのないように、理解と謎が循環するような仕組みがつけられていることを確認した。

最後の第3章では、作品コンセプトをつくるためには、自分の世界観を知ることでその世界観が含んでいる視点、関係性、見解、解釈、などを鑑賞者と共有できる言葉で具体化する必要性について考察し、表現スタイルに関してもコンセプトに関しても、制作者にとって必要となる時間軸としての美術史、空間軸としての今の美術の状況を参照していく視点と方法について探求した。

現代絵画のコンセプトをつくるために必要なことを考えるにあたり、田坂広志の『使える弁証法』に述べられている螺旋的発展の法則を参照した。どの分野のスタイルで、どんなコンセプトの流れで、どのような進歩を加えて発展させたいのかという問いをつくることで、現代絵画のコンセプトをつくるための方法が生まれることを検証した。そこから、自分自身の作品スタイルを自身の世界観と照らし合わせながら、やるべきことを定め、螺旋的発展の法則を使いながら、言葉を練り上げてコンセプトをつくっていくという手立てを導き出した。コンセプトが明確な言葉になることで、それが世の中に新しい価値を提供しているかどうかを確かめることができる。

さらに、自身の世界観を探るために、自分自身がどのような現在を生き、どのように世界を理解しているのか、ということに意識的になることの大切さを述べた。また、絵画の要素を芝居に喩えることで、画家が絵画制作全体にどう関わっているのか、という問いに対しての答えを見つけていく方法論を導き出した。さらに、絵画における表現スタイルとコンセプトの関係性や、アーティストの世界観と絵画コンセプトの関連性を明らかにした。

その結果、現代絵画のコンセプトとは、＜創造的な問いを立て、創造的な答をつくる＞、＜関係性とバランスについて考える＞であることが明らかになった。そして、自分自身の絵画コンセプトを考えるのではなく、現代絵画のコンセプトのつくり方を考えることでメタレベルの視点が働き、ここで導かれた結論が結果的に自分自身の絵画コンセプトになっていることを認識した。また、その二つに加え、私自身の世界観から生み出された、＜幸せな思考を自らつくろうとする意識＞を加えた三つのコンセプトを見出したことが、本論文の意義である。

コンセプトをどのようにつくるか、それ自体がコンセプトの重要な要素であることが明らかになったが、できたコンセプトを具体的に発展させる方法まで論を進めることができなかつたことが課題として残った。また、制作者である限り当然のことではあるが、自らの手で今後本論の正当性を実証することが必要である。